

時制交替と述語

「テイル/テイタ」と「ル/タ」

伴 映恵子

1. 問題提起

日本語の時制交替というテーマを扱うとき、時おり問題となるのが、交替を起こす述語の種類である。大別してそれは、形容詞や繫辞の「ダ」または「テイル」形の動詞を伴う静的述語か、あるいは一般的な動詞の「ル」形を伴う動的述語か、ということであるが、少なくとも語りの文を扱っている先行研究では、静的述語の方がより時制交替を起こし易い、という点が指摘されてきた（牧野(1983)、曾我(1984)、池上(1986)等）。一方会話文については、どちらがより交替を起こし易いということはない、という考察もある（松村(1997)）が、全体にあまり問題化されていないのが実情である。

ところで、この点に関連して、先行研究において決定的に欠如していると思われる点がある。それは、動詞述語に限定した交替の種類すなわち「テイタ/テイル」と「タ/ル」の交替が表わす相違についての議論である。もちろんこれは、従来指摘されてきた、静的述語と動的述語という問題に含まれ得るものではある。しかし、静的か動的かという従来議論は、動詞のみについて言えばあまりにも漠然としているように思われる。次の例を見られたい。

(1) 子供が大声で泣いている / 泣いていたんです。

(2) 子供が大声で泣く / 泣いたんです。

(1)と(2)の間にアスペクト的相違があることは明らかであるが、他に、それぞれの時制の対立の仕方などにも、決定的な違いがあるように思われる。つまり、(1)では、「テイル/テイタ」が、時制上、現在/過去という対立を引き起こしているが、(2)では、「ル/タ」が、必ずしも現在/過去という対立

伴 映恵子

を引き起こしているとは言えないからである。日本語の基本形が原則的に現在を表す訳ではないという事実を鑑みれば、これは当然のことであるが、時制交替に関する先行研究では、これらの違いに注目することなく、これらを時制交替の現象として一括して取り扱ってきたのである。本稿では、これらの相違を明らかにすることによって、これまでの研究で曖昧にされていた部分を解明する手がかりを見出したいと思う。

2. 会話における時制交替と述語との関係

2.1. 二つの時制交替のパターンに共通する効果

「テイル/テイタ」の交替と「ル/タ」の交替は、それぞれどんな効果を伴うものなのだろうか。例を見ながら考えてみたい。まず、本項では、ふたつの交替に共通する効果を考えてみる。まず、「テイタ/テイル」の例を見られたい。

- (3) 「とんでもない。...あの強い雨がジャンジャン顔をたたいているんですもの。...楽しいなんてことじゃなかったわ」(『あいつと私』)
- (4) 「届いたか何か知らないが、全然おかまいなしですよ。聞こえやしません。相変わらずものすごい顔つきでね、こう、踊ってるんです。ありゃ本物です。狐つきだ。芝居なんぞじゃねえですよ。まるっきり無我の境地なんだから」(『御手洗潔の挨拶』)
- (5) 「キッス・シーンが良いわ。素敵よ。それからベッド・シーンが凄いの。まるで裸よ。わたし、頭痛くなっちゃった。渡辺さんとふたり並んで見ていたらね、渡辺さんくらくらしているの。ほんとに、ぶるぶるくらくらしているの。純情ね。呆れたわ」(『青春の蹉跎』)
- (6) 「上原静子の名であそこに入った彼女はなにしろ素人ですからね。様子を知ろうとしてきょろきょろしているんです。あれじゃ向う側にすぐ察知される。そこで、ぼくは(...)。」(『彩り河』)

次は、「タ/ル」の交替例である。

- (7) 「私にね、私にさわると悪いように、離れるように反って、お踊りになるんですもの。」(『山の音』)
- (8) 「そうじゃない？お父さまだまりこくって、まずそうに召し上がるのよ。わたしだってさびしいわ。」(『山の音』)
- (9) 「私の腕を掴んだまま転ぶんですもの。重かったでしょう？」(『愛しい女』)
- (10) 「(...)ところが、あの人、食べようとして、あわてて口を抑えるのよ。どうしたのかと思ったら、急に吐き気がしたんだって。」(『愛しい女』)
- (11) 「二度目は、わたしが働きに行っている等々力の家にまであの男は電話をかけてきて、近所へ呼び出すんですからね(...)」(『彩り河』)

(3)～(6)が「テイル」による交替を、(7)～(11)が「ル」による交替を表しているが、いずれにも共通している点は、まず、時間的視点の移動である。いずれも、「夕」の欠如によって、発話時に立って過去の出来事を語るという通常の視点が失われている。

次に、この視点の移動に関連することであるが、交替を伴う文の内容が、新情報としてではなく、各主題の一環を示すものとして提出されているのではないかということである(伴(2000)p.27 参照)。逆に言えば、以下の例に見られるように、話し手の情報提供の態度を表す場合には、「夕」形が必然的となり、時制交替は不可能である。

- (12) 「いったいどうしたというんでしょう。」(...)
「子どもをおろした(*おろす)んだよ。」(『山の音』)
- (13) 「どうしてまた話がぶりかえしたんだ」晋也が訊いた。
「女が出来たのだったら慰謝料を取るといいだした(*いいだす)の」(『湯く』)
- (14) 「そりゃ、安田さんが駅に向うタクシーの中で、何度も腕時計をながめるんですもの(...)」(...)
「なに、安田さんは、何度も腕時計を眺めていた(*眺めている)って？」(『点と線』)

伴 映恵子

聞き手への情報提供の態度を表す際、「(テイ)ル」形を用いることは不可能であることがこれらの例文から察せられる。(14)では、時制交替の起こっている話し手の発話(すなわち、話し手が情報提供を意図しないで行った発話)を、聞き手が自分自身に対する情報として言い換えているが、この場合もやはり、時制交替は不可能となる。

したがって、(3)から(11)の時制交替に共通するもうひとつの点は、話し手における情報提供の態度の欠如であると考えることができる。

2.2. 「テイル」形の時制交替

「テイル」形の時制交替には必然性があるのだろうか。まず、文脈及び文法上「タ」形が用いられない場合がもちろんある。

(15) 「(...)すると、お時さんはその男の人の隣の座席にすわって、たのしそうに話している(*話していた)じゃありませんか。まあ、あきれたもんだと思いました」「その場合、君たちはお時さんと話をしなかったのかね?」「せっかく、両人でこっそり楽しい旅行に出かけている(*出かけていた)ところですもの。邪魔しては悪いと思ったからそのまま黙って帰りました(...)」(『点と線』)

この文脈においては、「ジャアリマセンカ」「トコロデス(ダ)」ともに、文法上「ル」形を取らざるを得ない。「タ」形を取った場合、前者では、聞き手に事実を認めさせる意味を持つことになるため、これまでの例とは反対に、ふたりが情報を共有していなければ不可能である。後者については、「タ」を取ると、その動詞の表す時が出来事の時間より先行してしまうため、旅行出発時というこの文脈のなかでは不適格となる。

さらに、前項で示したように、時制交替が情報提供の欠如を生み出すとすれば、次のような場合は、時制交替が必然的となる。

(16) 「会社から帰って、着替える時、おじゅばんもきものも、自分で左前に合わせておいて、帯を巻きかけて、おかしな工合いだというふうに

- 立っている（*立っていた）んだから。（...）」（『山の音』）
- (17) 「家の灯が消えている（*消えていた）んだもの。ぎょっとしたわ...
子供たちが二人ともいなくなったのかと思って」「電話かけてきたん
だよ事務所へ、心細い声で」（『濁く』）
- (18) 「吉岡さんって、ヘンな人ねえ。」
「どうしてです。」
「みんなとつき合わないで、洗面所でひとりごと、言ってる（*言っ
てた）んですもの。」（『わたしが・棄てた・女』）

これらの例のように、聞き手が完全に話し手と話題を共有していて、情報提供の話し手が情報提供の態度を示していない場合は、「タ」形は却って不適格となる。例えば(17)における「吉岡さん」とは聞き手自身を指しており、話し手はもちろん、聞き手自身の行為に対して情報を提供するために話しているわけではない。したがって、「タ」形は不可である。

では、前項で挙げた例のような場合はどうか。

- (3) 'あの強い雨がジャンジャン顔をたたいていたんですもの。
(4) '相変わらずものすごい顔つきでね、こう、踊ってたんです。
(5) '渡辺さん慄えていたの。ほんとに、ぶるぶる慄えてたの。
(6) '様子を知らうとしてきよろきよろしていたんです。

「テイル」も「テイタ」も、動作またはその結果を、「時間的限界を無視して継続的にとらえ」（奥田, 1977）ているという点では共通しており、両者を区別するものは、基本的に現在か過去かというテンスの対立にすぎない。すなわち、「シテイル」は現在の、「シテイタ」は過去の、それぞれ継続性を示している。よって、過去の出来事に対して時制交替が起こる場合も、基本的には、視点の移動、そして情報提供の態度の欠如以外の変化は生じないと思われる。したがって、上に示したように、「テイル」を「テイタ」に置き換えても、それほどの違和感は起こらない。次の例も同様である。

- (19) 「いやはや、アテがはずれましたよ。僕が行ったときには、ちゃんと彼女はベッドの上に坐っている（坐っていた）のです。おまけにね、

伴 映恵子

傍のテーブルの上に、コーヒー茶碗が二つ置いてあって、ゆらゆらと湯気が立ちのぼっている（立ちのぼっていた）のです。（…）」（『漂う部屋』）

- (20) 「夢ですよ。僕も二度ばかり見ましたよ。一度はアメリカにいるとき、胸をやんでどうしようか、と思っている頃に、枕元でおふくろが観音さまを拝んでいる（拝んでいた）んです。（…）」（『抱擁家族』）

2.3. 「ル」形の時制交替

次に、「ル」形の場合はどうか。「ル」形についても、文脈上または（及び）文法上、交替が必然的な場合がある点では「テイル」形と同様である。次の例を見られたい。

- (21) 「だって散歩から一人で戻ってきたら...事務所の奥で変な嘔れ声がする（*嘔れ声がした）でしょ。（…）」（『わたしが・棄てた・女』）
- (22) 「この前行った時も、私がさんざん言ってやったのを、子供が立聞きしてたんですね。隣の部屋で不意にすすり泣きが聞える（*聞えた）じゃありませんか。」（『千羽鶴』）

しかし「ル」形の場合、「タ」形との対立が「テイル」形と「テイタ」形とのそれとは異なり、単に時間の問題や情報の提供有無の問題だけでは済まない場合が多く出てくる。

例文（7）～（11）を「タ」形で表してみよう。

- (7) '「私にね、私にさわると悪いように、離れるように反って、お踊りになったんですもの。」
- (8) '「そうじゃない？お父さまだまりこくって、まずそうに召し上がったのよ。わたしだってさびしいわ。」
- (9) '「私の腕を掴んだまま転んだんですもの。重かったでしょう？」
- (10) '「（…）ところが、あの人、食べようとして、あわてて口を抑えたのよ。どうしたのかと思ったら、急に吐き気がしたんだって。」
- (11) '「二度目は、わたしが働きに行っている等々力の家^{（1）}にまであの男は電

話をかけてきて、呼び出したんですからね (...)」

「タ」形による交替は可能ではあるが、「ル」形で表された場合とは、明らかに異なる意味をもたらしているように思われる。

ところで、動作またはその結果を「時間的限界を無視して継続的にとらえ」ている「テイル」や「テイタ」に対立して、「ル」と「タ」は、動作を「継続性を無視して時間的に限界づけてとらえ」(奥田1977)ているという点で一致しており、基本的に、「テイル」と「テイタ」が、現在・過去という時制的対立を起こしているのに対し、「ル」と「タ」は、このような対立を持たない。それは、前述したように、このようにアスペクト的に継続性を持たない「ル」が、一般の動詞において「現在」を表さないからである。したがって、「ル」と「タ」の対立は、現在・過去のそれではなく、ポテンシャルかアクチュアルかという対立になる。

このように見てみると、時制交替の効果は、「テイル」による時制交替のそれとは別のものであるというふうに考えられるのではないだろうか。つまり、「ル」形で表された行為に対しては、時間とは切り離された行為そのものに視点が置かれ、「タ」形で表された行為に対しては、既に完了したものとしての行為に視点が置かれているということである。

- (7) 私にさわると悪いように、離れるように反って、お踊りになるんですもの。<抽象概念としての行為に視点>
- (7)' 私にさわると悪いように、離れるように反って、お踊りになったんですもの。<完了的行為に視点>
- (8) 「そうじゃない?お父さまだまりこくって、まずそうに召し上がるのよ。わたしだってさびしいわ。」<抽象概念としての行為に視点>
- (8)' 「そうじゃない?お父さまだまりこくって、まずそうに召し上がったのよ。わたしだってさびしいわ。」<完了的行為に視点>

このように、時に制限を持つ行為に視点が当てられる場合と、抽象概念としての行為に視点が当てられる場合とでは、そこに付加されるモダリティのあり方にも当然違いが生じると考えられる。その点を次項で考察する。

伴 映恵子

2.4. モダリティと「ル」形

伴(2000)でも述べたように、会話における時制交替では、「ン」に代表されるモダリティ表現との共起が一般的であり、それがないと文としての安定性を失うことが多い。そして、その傾向は「テイル」形よりもむしろ「ル」形に強いように思われる。「テイル」形の場合、数は少ないが、モダリティ表現が発話の特殊な調子に取って代わられる場合もある。

- (23) 「(...)このあいだ僕がひょいと応接間へは行って行ったら君、妹を裸にしてソファの上に寝かせてさ、それをモデルにして描いていやがる!」(『幸福の限界』)
- (24) 「(...)僕はそんなに不信用なんですかと聞くと、ええと云って笑っている。厭になっちゃった。(…)」(『三四郎』)
- (25) 「(...)Sは僕の方を見ても知らん顔をしている。(…)」(『友田と松永の話』)

一方、「ル」形については、モダリティ表現を伴わない使用は極めて坐りが悪いようである。

- (7) ”?私にさわると悪いように、離れるように反って、お踊りになる。
- (8) ”?お父さまだまりこくって、まずそうに召し上がる。

これはまさに、ある定まった時間的枠組みの中で行われたはずの動作が、単なる概念としてそのまま差し出されるために起こる坐りの悪さなのではないだろうか。したがって、次のように、これが<反復性>として使用される場合には、モダリティ表現がなくても不自然ではない。

- (26) 「ところが、替えたばかりの電話に掛けて来る、おかしいと思ったら、ご丁寧に電話局のほうで、前の番号から新しい番号にお掛け直し下さいとテープを流していた。」(『あした天気にしておくれ』)
- (27) 「(...)あのあたりは、なんとかせんべいって言って、大きいの。それを三枚も四枚も蒲団の中に引き入れて、ぼりっぼりと食べる。(…)」(『浄徳寺ツアー』)

それでは、モダリティと「ル」形は、どのように作用し合っているのでしょうか。この点を考える前に、まず、ともに時制交替のかたちである「ル」形と「テイル」形との違いについて考えてみたい。

まず、「ル」形が動作の<完成性>を表し、「テイル」形が動作またはその結果の<継続性>を表すというアスペクト的相違がある以上、次のような瞬間性の動詞は、文法的に交換不可能である。

- (9) 私の腕を掴んだまま転ぶ (*転んでいる) んですもの。
- (11) 二度目は、わたしが働きに行っている等々力の家にまであの男は電話をかけてきて、近所へ呼び出す (*呼び出している) んですからね。

だが、継続動詞の場合は、次のように、交換を行っても文法的支障は必ずしも生じない。

- (7) 私にね、私にさわると悪いように、離れるように反って、お踊りになる (お踊りになっている) んですもの。
- (8) お父さまだまりこくって、まずそうに召し上がるの (召し上がってる) のよ。

では、この場合の「ル」と「テイル」のアスペクト的相違は、何を反映しているのでしょうか。以下の例で考えてみたい。

- (28) 昨夜は大変でした。うちの赤ん坊が一晩中 | 泣く んです。
| *泣いている

この例において、「テイル」形が適切でないのはなぜか。筆者によれば、これは、発話状況における話し手の動作主または動作自体に対する心理的距離によるのではないかと考えられる。つまり、心理的距離が近いと考えられる場合は、「ル」形の方が適切となる。なぜならそのような場合、話し手の関心は、動作の継続や完了といったアスペクトの問題にではなく、動作の概念そのものに集中しているからである。「テイル」形が用いられ、話し手の視点が<継続性>というアスペクトに置かれる場合、話し手の動作主に対する心理的距離感はずっと長く

することが話し手の動作（主）に対する心理的距離の表われにつながるとすれば、モダリティ表現は必然的と言わざるを得ないであろう。そしてそれが、具体的には、憤慨・失望といった感情の提示を導くのである。それでは、基本的にモダリティ表現を伴わない語りの文のなかでは、どのような相違が起こるのであるのか。それを次項から見ていきたい。

3. 語りにおけるふたつの時制交替

本論の冒頭で触れたように、語りにおいては、動的述語より静的述語の方が時制交替を起こし易いということが既に指摘されてきている（牧野(1983)、曾我(1984)、池上(1986)等）。ここで問題にしている動詞に限って言えば、動的述語とはすなわち、静態動詞などを除く大部分の動詞の「ル」形を指し、静的述語とは、動詞の「テイル」形や静態動詞などの「テイル」形を指していると考えられる。一方、会話においては、特に静的述語の方が交替を起こし易いということはない。この相違が、前項までに述べてきたような、「ル/タ」「テイル/テイタ」の本質的な違いに因るものなのか、会話と語りという文体上の違いに因るものなのか、あるいはその両者に関連しているのか、ここでは考えてみたい。

3.1. 語りにおける視点と交替

実際、語りのなかでは、動作性の「ル」形が、時制交替を起こしにくいのは確かのようなのである。沢崎（1983）は、『愛の渇き』（三島由紀夫）の一節の文末をいろいろ書き換えた末、以下の（例文（33）'）書き換えが最も不自然であるとす

（33） 悦子は各駅停車の宝塚行に乗って座席に掛けた。窓外はとめどもない雨である。前に立ってゐる乗客がひろげてゐる夕刊新聞の印刷インクの匂ひが彼女を物思ひからよびさました。うしろぐらい人のやうな動作で、彼女は自分のまはりを見まはした。何事もない。（三島由紀夫『愛の渇き』）

（33）' 悦子は各駅停車の宝塚行に乗って座席に掛ける。窓外はとめどもない

伴 映恵子

雨であつた。前に立ってゐる乗客がひろげてゐる夕刊新聞の印刷インクの匂ひが彼女を物思ひからよびさます。うしろぐらい人のやうな動作で、彼女は自分のまはりを見まはす。何事もなかつた。

無論これは自然さの問題であつて、文法的妥当性の問題ではない。だが実際には、会話における時制交替の原則につながる要因がここにはあると思われる。すなわち、会話における一般的な時制交替では、話し手自身の行為を示す述語に交替が起こることはあり得ない(伴(2000))。なぜなら時制交替は、その行為や出来事への視点があつてこそ成立するものだからである。会話においてその視点とは、話し手のそれ以外にはあり得ない。一方、語りにおいては、その視点が定まらない。だが、語りの場合は、話し手(=語り手)の位置が視点の定位置なのであり、その話し手によって描かれる人物の行為は外側から「タ」形で表されるのが普通である。そして、その視点が人物である第3者に移ったときにこそ、交替が起こるものである。「窓外」「自分のまはりを見まはした」という表現が、その視点の存在を明らかにしている。原文の(33)ではこのような操作が行われているわけであるが、(33)'はそれをことごとく逆転させている。この例文の不自然さはまさにその点にあるといえるだろう。

このように、作中人物の行為が、話し手(=語り手)の位置すなわち発話の時点から描かれるのが普通だとすれば、しばしば話の展開に用いられる動作性述語に時制交替が起こりにくいのは当然であるといえる。実際、数少ない動作性述語の時制交替は、たいていの場合、話の展開としての行為ではなく、次のように、やはり視点人物から見た現象の一部として描かれているものである。

- (34) 「おい、飯だ」と杯をおいて言うと、女房は、「はい」と、そのときだけは縫物の手をやめて、給仕してくれたが、また着物をとりあげる。(…)重太郎は飯を口に入れながら、それをつくづくと見た。(『点と線』)
- (35) 五郎は秋幸の剣幕に「はい」と軍隊口調で返事をし、胸ポケットから鍵をさぐりながら廊下を歩く。地下足袋を脱いでいる秋幸の脇を通り抜けた時、果物のような香油のにおいがした。(『枯木灘』)
- (36) 「洋一が何か言うとしたか」と徹は訊いた。秋幸は立ちあがり首を振つ

た。徹は手に持った煙草を棄て、日が眩しくてかなわないと言うように眼を細める。(『枯木灘』)

ここでは確かに動作性述語の時制交替が起こっているが、それはあくまで、すでに移動した視点から見た現象の一部であり、展開をつかさどる、視点人物自身の行為(文中の各点線部)ではない。つまりこの場合でも、視点としての人物(会話においては話し手)の行為には本質的に交替は起こらないという、会話と同じ原理が働いているのである。語りにおいて、「テイタ/テイル」の交替に比べ、「タ/ル」の交替が圧倒的に少ないという事実は、ひとつにはこの理由に因るものであろう。

しかし、語りにおいて「ル/タ」の交替が「テイル/テイタ」のそれより頻度が少ないのは、それだけが理由であろうか。この点についてはすでに、牧野(1983)、池上(1986)がそれぞれ独自の解釈を行っている。牧野(1983)はそれを「絵画化」という表現で説明し、状態性の述語の方が、動的な述語より「絵画化されやすくなり、時制が現在形に転換する傾向が出てくるのだ」(p.116)としている。一方池上(1986)は、<他動性>の問題を論拠にし、「<状態>は<行為>と対立して<他動性>の低い場合の典型であり、その<他動性>の低さこそが、現在形を用い易くするのだと分析する。いずれも説得力のある解釈ではあるが、なぜその傾向が語りにだけに限られるのか、というように疑問点を拡大してみると、両者ともいささか心細さを帯びてくるように思われる。

ここで、逆に「ル」形は語りにおいてどんな場合に現われ易いのか、という点について考えてみたい。

3.2. 語りにおける「ル」形とモダリティ

実際、語りにおける「ル」形というのは比較的稀である。糸井(1986)は、「ル」形によってもドラマが動く場合がある」ことを指摘しているが、実は、その場合の「ル」形の大半は、話し手や視点とは全く関わりのないかたちで用いられる、すでに意味論的に固定化した用法である。そのひとつは<反復性>を表す交替である。

伴 映恵子

- (37) 世間をよそに、禅寺は禅寺のしきたりで動いていた。夏のことだから、毎朝おそくも五時には起きる。(『金閣寺』)
- (38) (しかし人夫たちは、安雄のことがあってから、軽口もめったに言わなかった。) 姉の家に朝、集まり、親方から倉庫の鍵をもらい、開けて道具を出し、車に積む。夕方、道具を倉庫にしまう。軽口も言わず、酒も飲まず、まっすぐそれぞれ自分の家にもどる。(『岬』)

これらの例文が明らかにするように、この用法では、会話における話し手自身や語りにおける視点人物自身の行為を示す述語にも交替が起こる。つまり、視点の問題とは無関係に行われる交替である。

もうひとつは、完結的行為の<継起性>を表す用法である。

- (39) 新治はジャンパアの内ポケットに手を入れた。金がない。反対側のポケットを探る。ズボンのポケットを探る。ズボンの内側まで手をさし入れてみる。(『潮騒』)
- (40) 「こんにちは」と母親が呼んだ。しばらく待つ。返事がない。もう一度呼ぶ。土間のわきの梯子段から、初江が下りてきて、「まあ、おばさん」と言った。(『潮騒』)

これらの例文から、この用法もまた、視点とは無関係に行われることが分かる。つまり、それだけ意味論的拘束性も強いということである。例文(38)(40)を「夕」で表してみる。

- (38) ' 姉の家に朝、集まり、親方から倉庫の鍵をもらい、開けて道具を出し、車に積んだ。夕方、道具を倉庫にしまった。軽口も言わず、酒も飲まず、まっすぐそれぞれ自分の家にもどった。
- (40) ' 「こんにちは」と母親が呼んだ。しばらく待った。返事がない。もう一度呼んだ。土間のわきの梯子段から、初江が下りてきて、「まあ、おばさん」と言った。

(38)'はもはや<反復性>ではなく、<一回性>の出来事しか表さない。また、(40)'では、各行為は独立したものとなり、連続性としてのまとまりは消滅する。

ここで本論のテーマに戻すと、語りのなかの数少ない「タノル」の交替の大部分は、このような必然性によるものである。このことは何を意味するのだろうか。

会話と語りというふたつの文体の根本的な相違は、発話時と出来事時との関係にある。つまり、会話では両者はダイクティックな関係にあるが、語りでは基本的に断絶しているわけで、この相違が、時制交替についてもモーダルな相違を生み出す。すなわち会話では、モダリティ表現との共起によって、「出来事時における話し手の意識の再現」（伴、2000, p.32）が行われるが、語りではそのようなことはない。しかし、前節で示したように、「タノル」が、過去の行為と概念としての行為との対立を表すという点については、会話でも語りでも違いがない。そして会話では、モダリティ表現が添えられることによって、この概念としての行為に時間的アクチュアリティが加わるが、基本的にモダリティ表現を排斥する語りでは、時間的アクチュアリティが付加されず、概念のまま提供されることになる。「ル」形が語りのなかで用いられにくいのは、まさにそのことにも原因するのではないだろうか。ところが、上に挙げた<反復性>、完結的行為の<継起性>という用法では、行為はすでに時間的アクチュアリティを超越しており、時制交替が意味論的に強制化される。したがって、これらの交替は語りにおいても、レトリック以前の交替と考えられるのである。¹

3.2. まとめ

ここで再び本節の問題をまとめてみると、語りにおいて「タノル」の交替が現われにくい理由として、少なくとも以下のふたつの点が挙げられるであろう。ひ

¹ だが、このことは、このような用法が、モダリティ表現と共起しないことを意味するわけではない。現に語りにおいても会話においても、次のような、<反復性>を表す交替と「ノダル」表現との共起は頻繁に行われる。

[例1] 昼日中、突然仕事の手を停めて二階へ駆けあがり、いやがる妻を押し倒すと、さっさと目的を達してまた仕事に戻るのである。（『夢見通りの人々』p.95）

[例2] 母は昼間はインスタント・ラーメンか、そばを食べるのである。（『木枯しの庭』p.95）

この事実は、日本語においては、文体に関わらず、「出来事時」と「発話時」が「対立するより融合する傾向が強い」（池上、1986, p.72）ことを意味しているだろう。

伴 映恵子

とつは、一般に、話の展開を示す出来事や行為には視点の移動は起こりにくく、そのため時制交替も生じにくいということ、もうひとつは、「ル」形が基本的に、時間的アクチュアリティを持たない概念でしかないため、会話のようにモダリティ表現との共起が一般的でない語りでは、現われにくいかたちとなるということである。最初に挙げた点は、牧野の「絵画化」に通じる理由であるが、牧野が指摘しなかった点として、これが、人物視点を持つ語り特有の現象であるということがある。会話では、常に、話し手＝視点となるため、出来事や行為に時制交替が起こるのは極めて普通のことなのである。

ただし、語りの時制交替に関してこれまで指摘してきたことが、あくまで最も一般的な文体の傾向に過ぎないということを強調しておく必要がある。作家によっては、あえてこのような傾向を拒む場合もある。次の例はその典型である。

- (41) 田植えに使うような編笠をかぶり、女はすべるように、暗闇の中へ出て行った。男は首をかしげて、新しいタバコに火をつける。ひどく納得のいかない気分だった。立上がつて、そっと、ムシロの向うをのぞいてみることにした。たしかに、部屋はあったが、床はなかった。床のかわりに、砂が、なだらかなカーブをえがいて、壁の向うから落ちかかって来ていた。思わず、ぞっとして、立ちすくむ。(『砂の女』)

ここに現れる時制交替が、一般的な傾向を持っていないことは明らかである。時制交替はあくまで作中人物の行為に現れ、作中人物の視覚を通して見られると考えられる現象は、すべて「タ」形で描かれている。語り手「みづからが特権的作中人物(言表表現の主語)と化する」(中山、1993、p.7)安部公房独特の文体を象徴する一部ともいえるであろうが、このように、時制交替のタイプは文体に対して押し付けられるものではないという点に注意する必要がある。

4. 結論

本稿では、これまで問題化されていなかった「テイタ/テイル」と「タ/ル」というふたつの対立の違いについて観察しつつ、今まで曖昧模糊としていた静的述語と動的述語の交替の相違についても考察を行った。そして、なぜその点につ

いて、会話と語りの間に差が生じるのか、という点も掘り下げてみた。その結果、「テイタ/テイル」の対立は、過去と現在という時間的対立があるのに対し、「タ/ル」という対立にはそれがなく、アクチュアル化された行為と概念としての行為という対立が存在することが分かった。そして、この対立の違いが、他の要因と重なって、会話と語りの間に不均衡を生み出すものと考えられる。すなわち、現実にはアクチュアルな行為を概念として直接差し出すことは容易ではないが、会話では、モダリティ表現との共起がそれを可能にする。一方、語りにおいては、「ル」形の使用が非常に限られるが、それは、語りが原則的にモダリティを伴わないということの他に、会話より複雑な視点のあり方によって、行為や出来事に時制交替が起こりにくくなる、という点が挙げられよう。このように、時制交替は、述語や文体の性質などが相互に作用し合って、その傾向を生み出して行くということがいえる。

[参考文献]

- 池上嘉彦 「日本語の語りのテキストにおける時制の転換について」、日本記号学会編『記号学研究6 語り 文化のナラトロジー』、1986年、61-74頁
- 糸井通浩 「物語・小説の視点」、『表現学論考題二』、1986年、65-72頁
- 奥田靖雄 「時間の表現(1)(2)」、『教育国語』、1988年、2-17頁、28-41頁
- 工藤真由美 『アスペクト・テンス体系とテキスト 現代日本語の時間の表現』、ひつじ書房、1995年
- 沢崎浩平 「時の表現あるいは時と表現」、『講座日本語の表現[5] 日本語のレトリック』、筑摩書房、1983年、138-150頁
- 曾我松男 「日本語の談話における時制と相について」、『言語』第13巻4号
- 中山真彦 「「書く」ことが「行う」ことである時 - 安部公房の長編小説とそのフランス語訳について(上) -」、『東京女子大学紀要「論集」第44巻、第1号
- 伴映恵子 「日本語における「時制交替」論の問題」、『ことばの科学』第13号、

25-40頁

- 牧野成一 「物語の文章における時制の転換」、『言語』、第12巻第12号、1983年、109-117頁
- 松村瑞子 「日本語の歴史的現在と主語の人称」、『九州大学言語文化部言語研究会』、第32号、1997年
- BENVENISTE, E., *Problème de linguistique générale*, Gallimard, 1966.
- FLEISCHMAN, S., “Verbe tense and point of view in narrative.”, *Discourse-Pragmatics and the verb, The Evidence from Romance*, Routledge, 1991, p.26-54
- HOPPER, P. J., “Aspect and foregrounding in Discourse”, *Syntax and semantics: Discourse and syntax*, ed. By Talmy Givón, Academic press, vol.12, 1979, p.213-241
- SCHIFFRIN, D., “Tense Variation in narrative”, *Language: Journal of the linguistic society of America*, ed. by William Bright, vol.57, 1987, p.45-62
- WOLFSON, N., “The Conversational historical present alternation”, *Language: Journal of the linguistic society of America*, ed. by William Bright, vol.55, no.1, 1979, p.168-182